

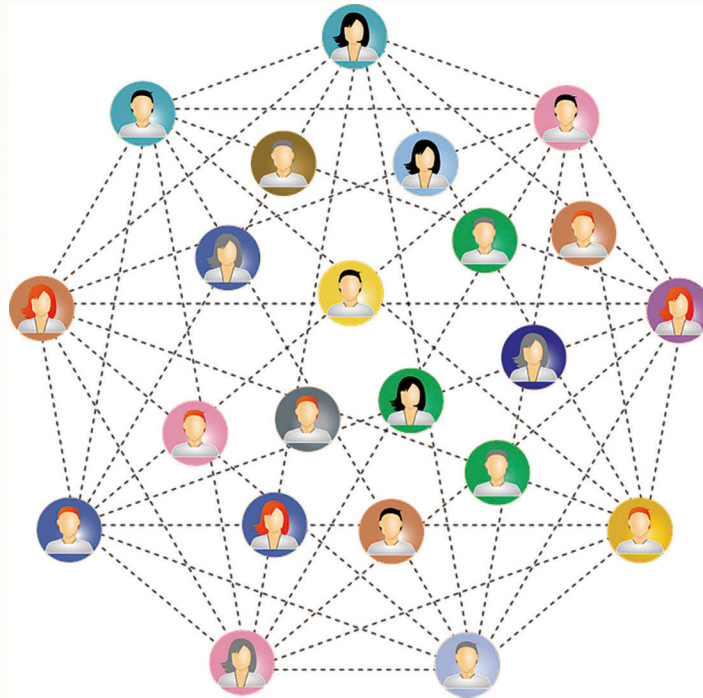
人生は一期一会，人の役に立つ皮膚科医でありたい

橋本 由起

東邦大学医学部皮膚科学講座講師

皮膚科医として丸20年を迎え、21年目が始まろうとしている。思い返せば20年前、皮膚科医としての志はそれほどでもなかったと思う。両親は医師ではなく、親の背中をみて育ち医師を志したわけではない。ただ、父親が「これからの女性は手に職だ。結婚しても亭主に頼って生きる時代ではない。自分の力でお金を稼ぎ、自立した社会人になることがこれからの女性には求められる。そして人のために役立つ職業が何より大切だ」といった。そうすると、男女問わず世の中の役に立ち自立して一人前の社会人としてお金を稼げる職業といえば、医師・歯科医・弁護士・看護師・薬剤師など有資格者であろうと漠然と思い描いた。そして理系の職種を考えていた自分は、医師の道を志そうと決めた。看護師も考えたが、当時は女性ばかりの集団であり自分のキャラクターからして女性の集団に馴染める自信がなく、さらに診断と治療は看護師ではなく医師が担う役割であるため選択肢から外れた。そこからはがむしゃらに勉強し、なんとか私立大学の医学部へ進学した。同級生よりも少しだけ経済的に恵まれていた環境であったことは、いまでも父親に感謝してもしきれない。誰もが手にすることができる選択ではないことは決して忘れてはならない。たった100人という小さなコミュニティである医学部で6年間同じ医学の道を志した同級生はかけがえのない仲間であり、いまでも自分自身を理解してくれる大切な存在である。

話は戻り、なぜ皮膚科医となったのかというと、1つはよくいわれるように目でみてある程度診断が可能で、他科に比べると一人前になるのが早く、女性が男性と対等な関係を構築できる点である。もう1つは、最短5年間の実地訓練と業績を積むことで皮膚科専門医になれるので、専門医取得後すぐに開業ができる点である。当時の自分はそんな単純な理



由で皮膚科医を選択した。もちろん皮膚科は学問的にも興味があり、仕事の内容も皮膚病理は苦手であったが、とくに辛いということもなく、それなりにそつなくこなしていたと思う。ただし、大学院へ進学し研究生生活を経て医学博士を取得し、その後留学までするのは夢にも思っていなかった、というか考えたこともなかった。それがいまとなっては4年間の大学院生活、2年間の留学生活を経て、帰国後には医局長(終了)、病棟医長(終了)、教室年報編集係(終了)、外来医長(現職)、乾癬外来チーフ(現職)、大学講師(現職)とさまざまな役職を担ってきた。20年前の自分からすると想像もしていなかった人生である。

皮膚科医として働き始めたばかりのころは他大学の皮膚科医との交流が生まれるとは予想もしていなかったが、留学から帰国し乾癬外来を一人で担当するよう命じられ必死で目の前の重症な乾癬患者を治療しているうちに、自然と同じ分野で活躍する皮膚科医との出会いが生まれた。また乾癬という疾患を通じて、難治性皮膚疾患に取り組むことへのやりがいと、26年前に医師を目指すきっかけとなった人の役に立つ仕事に就けたのだという喜びを少しずつだか感じられるようになった。自分の仕事に誇りをもてるような皮膚科医がこれからもぜひ増え続けて欲しい。